

# 農業技術情報

2022年6月3日

ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所	015-572-3128
J A 幕別町	0155-54-4118
J A さつない	56-2131
J A 帯広大正	64-4591
日甜幕別原料事務所	54-2756
幕別町農林課	54-6605

各作物の生育・作業の遅速（幕別町6月1日）

（）内は平年値（※春小麦は暫定）

作物名	遅速日数	生育および作業状況	生育期節
秋まき小麦	早3	草丈 67.5(61.8)cm 茎数 956(893)本/m <sup>2</sup> 上位茎数 676本/m <sup>2</sup>	止葉期 5/22 (5/25) 出穂始 5/30 (6/2) 出穂期 6/1 (6/4)
春まき小麦	早6	草丈 49.2(※41.9)cm 葉数 6.3(※6.2)枚 茎数 993(※1,080)本/m <sup>2</sup>	幼穂形成期 5/18 (※5/22) 止葉期 6/2 (※6/8)
馬鈴しょ	早3	茎長 6.0(4.1)cm 茎数 4.0(2.8)本/株	萌芽期 5/22 (5/25)
大豆	早3	は種期 5/15(5/17) は種終 5/19(5/22)	出芽始 5/24 (5/27) 出芽期 5/26 (5/29)
小豆	早2	は種始 5/17(5/16) は種期 5/20(5/22) は種終 5/24(5/26)	出芽始 5/30 (6/1) 出芽期 6/1 (6/3)
菜豆	—	は種始 5/25(5/26) は種期 5/30 (6/1)	
てん菜(移植)	早2	草丈 15.6(15.2)cm 葉数 11.9(11.1)枚	
てん菜(直播)	早2	草丈 7.4(5.8)cm 葉数 4.9(3.7)枚	
牧草	±0	草丈 69.1(68.6)cm	
飼料用とうもろこし	早3	草丈 17.8(13.9)cm 出葉数 4.3(3.8)枚 は種期 5/11(5/13) は種終 5/20 (5/22)	出芽期 5/20(5/23)
ながいも(マルチ)	—	植付始 5/8(5/15) 植付期 5/14(5/21) 植付終 5/24 (5/30)	
たまねぎ	遅7	草丈 15.2(19.5)cm 生葉数 3.0(3.3)枚 葉鞘径 4.9(5.6)mm	

## 畑作

### <麦類>

「きたほなみ」は平年と比べ3日早く出穂期を迎えています。出穂以降の最も重要な管理は赤かび病防除です。防除適期を逃さないよう、ほ場観察に努め計画的防除を行ってください。

#### 1 秋まき小麦の出穂期以降の窒素追肥

「きたほなみ」の出穂期以降に葉面散布で窒素追肥を行う場合は以下に注意して行いましょう。特に現在葉色が濃い傾向にあるため、高タンパクにならないよう注意します。

- (1) 尿素を使用する場合は1.0～1.5%液を計3回散布します。
- (2) 過去に高タンパクだったほ場は葉面散布を控えてください。
- (3) 高温時の散布は葉やけの原因になるので避け、原則夕方の散布とします。また、尿素濃度を1.0%程度まで下げるなどしましょう。

## 2 赤かび病の防除

赤かび病は開花時期に最も感染しやすく、多湿条件で多発します。1回目の適期は開花始期(図1参照)ですが、開花始に雨天の恐れがある場合は、出穂揃から防除します。出穂にばらつきが目立つ場合は、ほ場内の生育が早い部分に合わせて1回目の防除(開花始)を実施し、2回目以降の薬剤散布でほぼ全ての穂が薬液で保護されるように計画的な防除を実施してください。また薬剤の使用回数には十分注意してください。

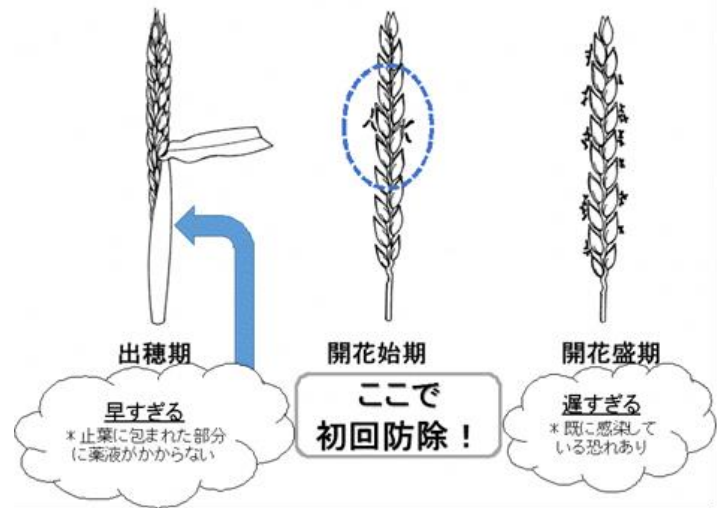


図1 赤かび病の1回目防除時期

表1 小麦赤かび病防除体系例

防除時期	農薬名	RACコード※	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
1回目(開花始)	バラライカ水和剤※	M4・3	500	収穫14日前まで	2回
2回目(1回目の7日後)	ベフトップジンフロアブル	M7・1	800~1,000	収穫14日前まで	1回(出穂後)
3回目(2回目の7~10日後)	シルバキュアフロアブル	3	2,000	収穫7日前まで	2回
	または ミラビスフロアブル	7	1,500	収穫7日前まで	2回
臨機(登熟期間)	チルト乳剤 25	3	1,000~2,000	収穫3日前まで	3回(春期以降)

※バラライカ水和剤は、硝酸カルシウムと混用する際は下記の順で混用下さい。

①バラライカ水和剤 → ②硝酸カルシウム (物理性の問題のため)

※農薬の耐性・抵抗性の発達を防ぐため、作用点や作用機構から各農薬の有効成分を分類したものが「RACコード」です。

「RACコード」が同じであれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤となり、連用となるので注意しましょう。

## 3 アブラムシ類の防除

ほ場を十分に確認して、薬剤防除の要否を検討しましょう。

【アブラムシ要防除水準】出穂 10 日後頃に半分以上の穂でアブラムシが観察される。

表2 アブラムシ類防除例

害虫名	農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
アブラムシ類	ゲットアウトWDG	3A	4,000	収穫21日前	3回
	スミチオン乳剤	1B	1,000	収穫7日前	1回

※スミチオン乳剤はアワヨトウ・ムギキモグリバエに登録有り。

## 4 春まき小麦の追肥

現在の生育は平年より進んでおり、止葉期を迎えています。止葉期以降の追肥可否は品種によります。

「春よ恋」: 止葉期以降の追肥は遅れ穂の発生につながりやすいので注意が必要  
「はるきらり」: タンパク向上のため、地力に応じ次表の追肥対応を参考とする。(中地力以上ほ場では、基本的に葉面散布のみ行い、止葉期までの生育が不足している場合のみ補助的に止葉期追肥も行う)

表3 「はるきらり」の追肥体系例

窒素肥沃度 区分	熱水抽出性窒素 (mg/100g)	窒素施肥量(kgN/10a)			
		基肥	止葉期	開花期以降 葉面散布	合計
低地力	0~5	12	4	3	19
中地力	5~10	12	0	4	16
高地力	10以上	8	0	4	12

## 5 春まき小麦の倒伏対策

過繁茂等で倒伏の恐れがある場合は、茎稈伸長抑制剤を散布しましょう(薬剤例は5/18号参照)。薬害を助長する場合がありますので、他剤との混用は避けてください。

## 6 春まき小麦赤さび病、うどんこ病の防除対策

既に一部ほ場でうどんこ病の発生がみられています。

「春よ恋」は赤さび病、うどんこ病に対する抵抗性がそれぞれ「やや強」・「強」、「はるきらり」は同じく「強」・「中」であり、臨機防除で対応します。現時点で下葉に病徴が見られるような場合は、その後の進展に注意し、止葉期に上位2葉に病斑が認められる場合は防除を実施しましょう。

表4 春まき小麦赤さび病、うどんこ病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
アミスター20フロアブル	11	2,000~3,000	収穫7日前	3回

## <てん菜>

5月下旬の降雨により干ばつは解消され、移植・直播とも生育は回復しています。除草剤のタイミングを逃さないように注意しましょう。

### 1 中耕

- (1) 土壌の膨軟化と地温の上昇及び透水性の改善と畦間の除草のため、「カルチ」「畦間サブソイラ」などを早期に施工し、生育促進を図りましょう。
- (2) 中耕の深さは根の広がりを見直し、次第に狭く深くなるようにして、畦間が茎葉で覆われる時期まで数回実施しましょう。
- (3) 中耕時、株元まで土を寄せると根腐病の発生を助長するので注意しましょう。

### 2 除草剤散布

- (1) 除草剤散布のポイントは適期処理にあります。気象条件や土壌水分等を考慮し、生育と雑草の発生に応じ、遅れないように注意してください。

- (2) 直播栽培は移植栽培と登録基準が異なるので注意しましょう。
- (3) 直播栽培の初回散布時期は雑草発生始～発生揃(てん菜本葉2葉期)で、は種後 30 日前後が目安になりますが、てん菜の葉齢が進んでいない幼小個体では生育が抑制される場合があるため、注意が必要です。
- (4) 直播栽培の風害対策でえん麦を混植した場合は、えん麦の4葉期までに遅れないようにイネ科除草剤(ナブ乳剤、ワンサイドP乳剤)による処理を行ってください。

### 3 アブラムシの防除

移植栽培におけるかん注処理の持続効果は40～45日間程度です。薬剤の持続期間を考慮し、間隔を空けすぎないように防除を実施しましょう。

表5 アブラムシの防除例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
コルト顆粒水和剤	9B	6,000	収穫7日前	3回
モベントフロアブル	23	4,000	収穫14日前	3回

### 4 根腐病防除の実施

根腐病は6月中旬頃から発生します。特に連作、短期輪作、排水不良など多発が予想される場合は、6月上中旬と7月中旬の2回防除を実施しましょう。特に直播栽培ではモンセレン顆粒水和剤のかん注処理を行っていないので根腐病防除を行いましょう。

表6 根腐病の防除薬剤例(200L/10a 株元散布)

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
ミリオネアフロアブル	7	4,000	収穫7日前	4回
リンバー顆粒水和剤	7	4,000	収穫7日前	3回
アミスター20フロアブル	11	1,500	収穫14日前	3回

## <ばれいしょ>

植付作業および萌芽は順調です。作業時期を逃さないように、ほ場を良く観察してください。

### 1 中耕・培土

「カルチ」・「畦間サブソイラ」等により土壌の膨軟化と地温の上昇を図り、通気性や透水性の向上に努めましょう。

#### 《慣行培土の注意点》

- ・晴天の午前中に行うと効果的ですが、土壌水分が低いと培土が崩れやすく、緑化の原因になる場合があるので、適度に水分がある時期に実施しましょう。
- ・土壌が過湿状態の時にすると、土を締め過ぎるので注意しましょう。
- ・培土作業が遅れるとストロンを損傷し、塊茎数の減少や肥大の妨げとなるため、着蕾期(平年6/12)までに最終培土を終えましょう。

### 2 除草剤

土壌散布は萌芽前までです。一年生イネ科雑草の茎葉散布については次表を参照に適切に散布してください。

表7 ばれいしょ除草剤(対象:一年生イネ科)の使用基準(例)

除草剤名	使用時期	10a当薬量	回数 (以内)	注意事項
ポルトフロアブル	イネ科雑草3~8葉期 (収穫前日まで)	200~300ml	1回	イネ科雑草が完全に枯死するには5~10日を要する。
ナブ乳剤	イネ科雑草3~5葉期 イネ科雑草6~8葉期 (収穫前日まで)	150~200ml 200ml	2回	効果の発現には2週間程度要する。
ワンサイドP乳剤	イネ科雑草3~8葉期 (収穫前日まで)	75~100ml	1回	イネ科雑草が完全に枯死するまで2週間程度を要する。

※上記3剤はいずれもスズメノカタビラに効果が劣る。

### 3 病害虫防除

#### (1) 疫病

平均気温 15℃以上(最適気温 18~20℃)、多湿条件で多発します。次号より掲載する疫病発生予察情報を参考に防除してください。

#### (2) ナストビハムシ・アブラムシの防除

林地や防風林の近くで多発しやすいので注意しましょう。ナストビハムシは成虫による葉の食害だけでなく、幼虫によるイモの表面や内部に至る糸状食入痕の被害により、食用・加工用では商品化率が低下します。成虫や葉の食痕を確認したら防除を行いましょう。成虫防除は幼虫密度を低下させます。

表8 ナストビハムシを中心とした防除例

害虫名	薬剤名	RAC コード	使用濃度 (倍)	使用時期	回数 (以内)
ナストビハムシ アブラムシ類	ゲットアウトWDG	3A	2,000~3,000	収穫7日前	4回
	モスピランSL液剤	4A	4,000	収穫7日前	3回
	アクタラ顆粒水溶剤	4A	ナストビハムシ:2,000 アブラムシ:3,000	収穫14日前	3回

※ナストビハムシ成虫の発生盛期(6月上旬)に7~10日間隔で2回実施する。

## <豆類>

大豆・小豆のは種作業は順調に終了しました。中耕により地温の上昇を図り、初期生育の促進に努めましょう。

### 1 除草剤の散布

例年、散布適期を逸したり、除草剤散布後の降雨などの影響で、薬害による生育遅延が見られます。豆類の生育や雑草の発生状況を確認し効果的な散布に心がけましょう。「パワーガイザー液剤」は有機リン系殺虫剤や他の除草剤との10日以内の近接散布は薬害の恐れがあるので避けましょう。\*薬剤使用例は5/18号参照

### 2 中耕

除草剤の残効を考慮し、地温の上昇と除草のため中耕を実施しましょう。除草のための中耕は、日中の暖かい日が効果的です。

### 3 大豆「わい化病」・菜豆「黄化病」(ジャガイモヒゲナガアブラムシ)の防除

山間部やほ場周辺に牧草地がある場合は、被害の拡大が懸念されます。クルーザーを使用していない場合は、出芽揃から初生葉展開期に1回目の防除が必要です。その後2回目の防

除を1回目の7日後頃に行いましょう。また、クルーザーを使用している場合についても、は種後1か月を目処に防除を行いましょう。 \* 薬剤例は 5/18 号参照

#### 4 金時のかさ枯病

低温・多湿条件や機械管理作業で蔓延します。予防防除としては、子葉展開期から10～15日間隔で銅剤を2回処理します。発病株は速やかに抜き取るとともに、治療効果もある「カスミンボルドー(銅シン水剤)」による防除を実施してください。

表9 かさ枯病防除例

病害名	農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
かさ枯病	ドイツボルドーDF	M1	500	—	—
	コサイド3000	M1	1,000		
	カスミンボルドー(銅シン水剤)	24・M1	1,000	収穫30日前	3回

※ 「粉衣用ペアーカスミンD」と「カスミンボルドー(銅シン水剤)」は合計の使用回数を3回以内とする。

# 野菜

降雨と曇天により、ほ場の湿度が高い状態にあります。病気の発生に注意してください。また、本年は害虫の発生が多いと予想されています。発生を確認したら速やかに防除をしてください。

## < レタス >

今後1週間、曇雨天日が続くとされています(6/2現在)。菌核病・灰色かび病等の病気が発生しやすい環境が続くため、予防的な防除を実施してください。

### (1)各種病害の防除

菌核病と灰色かび病は、15～20℃の多湿条件、すそ枯病とべと病は15℃程度の多湿条件で発生が多くなります。灰色かび病は特に結球期に発生しやすくなります。

表1 レタスの病害防除薬剤例

薬剤名	RACコード*	使用濃度	使用時期	使用回数	菌核病	灰色かび病	すそ枯病	べと病
パレード20フロアブル	7	2,000～4,000倍	収穫前日	3回以内	○	○	○	
アフエットフロアブル	7	2,000倍	収穫前日	3回以内	○	○		
アミスター20フロアブル	11	2,000倍	収穫7日前	4回以内	○	○	○	○
スミレックス水和剤	2	1,000～2,000倍	収穫7日前	5回以内	○	○		
ダコニール1000	M5	1,000倍	収穫14日前	3回以内			○	○

また、腐敗病は20～25℃の多湿条件で発生が助長されます。今後の天候に注意しましょう。

表2 レタス腐敗病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード*	使用濃度	使用時期	使用回数
カセット水和剤	31	1,000倍	収穫7日前	2回以内
	24			
バリダシン液剤5	U18	800倍	収穫前日	3回以内

### (2)ナモグリバエの防除

葉に白い点状の産卵痕が見られた場合は防除を実施してください。

表3 ナモグリバエの防除薬剤例

薬剤名	RACコード*	使用濃度	使用時期	使用回数
ダントツ水溶剤	4A	2,000倍	収穫前日	2回以内
アフーム乳剤	6	1,000～2,000倍	収穫3日前	3回以内
コテツフロアブル	13	2,000倍	収穫前日	2回以内

## < キャベツ、はくさい >

### (1)べと病・菌核病の防除

べと病は15℃程度の多湿条件、菌核病は15～20℃程度の多湿条件で発生が助長されます。

表4 キャベツ病害の防除薬剤例

薬剤名	RACコード*	使用濃度	使用時期	使用回数	べと病	菌核病
アミスター20フロアブル	11	2,000倍	収穫7日前	4回以内		○
ファンタジスタ顆粒水和剤	11	2,000～3,000倍	収穫3日前	3回以内		○
ランマンフロアブル	21	2,000倍	収穫3日前	4回以内	○	
レーバスフロアブル	40	2,000倍	収穫7日前	3回以内	○	

表5 はくさい病害の防除薬剤例

薬剤名	RACコード*	使用濃度	使用時期	使用回数	べと病	菌核病
ロブラール水和剤	2	1,000倍	収穫14日前	3回以内		○
アミスター20フロアブル	11	2,000倍	収穫7日前	4回以内	○	
ランマンフロアブル	21	2,000倍	収穫3日前	4回以内	○	
レーバフロアブル	40	2,000倍	収穫7日前	3回以内	○	

## (2) 軟腐病の予防防除開始

はくさい: 6月中～下旬頃から予防防除開始時期です。結球前から防除を開始してください。

キャベツ: 結球期に発生が多くなります。結球初期から防除を開始してください。

害虫の食痕等の傷口が侵入経路となるため、同時に害虫防除も注意が必要です。

表6 キャベツ・はくさいの軟腐病防除薬剤例

薬剤名	RACコード*	使用濃度	使用時期	使用回数
スターナ水和剤	31	1,000倍	収穫7日前	3回以内
バリダシン液剤5	U18	800倍(キャベツ)	収穫7日前	5回以内
		500倍(白菜)	収穫3日前	3回以内
Zボルドー	M1	500倍	—	—

## (3) 害虫防除

コナガ・モンシロチョウともに発生が多い傾向にあります。

### ① 育苗期後半の防除

・初期発生の抑制のため、ジュリボフロアブルのかん注処理を徹底してください。

### ② 定植後の防除

・コナガは薬剤抵抗性がつきやすいため、同一系統薬剤の連用は避けてください。

表7 コナガ・モンシロチョウの防除薬剤例(定植後)

薬剤名	RACコード*	使用濃度	使用時期	使用回数
ハクサップ水和剤	3A	1,000～2,000倍	収穫前日	5回以内
	1B			
ディアナSC	6	2,500～5,000倍	収穫前日	2回以内
グレース乳剤	13	2,000～3,000倍	収穫7日前	2回以内
エスマルクDF (BT剤)	11A	1,000～2,000倍	収穫前日(発生初期)	—

## (4) ジアミド系殺虫剤(RACコード:28)使用時の注意点

- ① 連用を避け、他系統とのローテーション防除を行う(できる限り1作型1回の使用)。
- ② 防除効果が低いと判断された場合は、他系統薬剤による追加防除の実施を検討する。
- ③ 使用する際は、所定の希釈倍率等を遵守する。

## (5) 定植後8葉期までのべたがけ資材について(はくさい)

はくさいは3～13℃の低温に10日以上あうと花芽を形成します(抽だいの原因になります)。

べたがけ資材の除去は低温の心配がなくなってから、曇天日または夕方に行ってください。

## < だいこん >

### (1) 亀裂褐変症と軟腐病の予防防除

多湿条件で気温が高くなると亀裂褐変症や軟腐病の発生が助長されます。

表8 だいこんの病害防除例

防除時期	病害名	薬剤名	RACコード	使用濃度	使用時期	使用回数	注意事項
は種後 20日目	亀裂 褐変症	バシタック 水和剤75	7	1,000～ 1,500倍	収穫 21日前	3回 以内	
は種後 25日目	軟腐病	Zボルドー	M1	500倍	—	—	クレフノン 200倍を加用



## (2)キスジノミハムシとコナガの防除

- ・は種時にフォース粒剤を使用したほ場では、は種後 20 日頃から茎葉散布を行ってください。

表9 だいこんの害虫防除薬剤例

防除時期	病害名	薬剤名	RACコード	使用濃度	使用時期	使用回数
は種後 20 日目	キスジ ミハムシ	エルサン乳剤	1B	1,000～2,000 倍	収穫30 日前	2回 以内
は種後 25 日目	コナガ	アグロスリン水和剤	3A	1,000～2,000 倍	収穫7日前	5回 以内

## < たまねぎ >

強風および干ばつによる影響から回復傾向にあります。しかしながら、生育は引き続き遅れ気味であるため、病害虫の発生には注意してください。

6月1日現在の作況調査結果 ( )内は平年値

草丈	生葉数	葉鞘径
15. 2cm(19.5cm)	3. 0枚 (3. 3枚)	4. 9mm (5. 6mm)

### (1)白斑葉枯病・べと病の発生初期の防除

- ・病気の初発は風の穏やかな場所が発見しやすいです。
- ・白斑葉枯病は2日以上連続した降雨、または 10mm 以上のまとまった降雨の後7日間は発生の可能性が高く、特に平均気温 18℃以上の温暖な日に初発の可能性が高くなります。
- ・べと病は気温が 20℃以下で、高湿度条件が続くと発生しやすくなります。

蔓延が早いため、発生しやすい条件下では特に予防防除を徹底してください。

表10 たまねぎ白斑葉枯病・べと病の防除体系例

防除時期	薬剤名	RACコード	使用濃度	使用時期	使用回数
6/上	グリーンダイセンM水和剤	M3	400～600 倍	収穫3日前	5回 以内
6/中	フロンサイド SC	29	1,000～2,000 倍	収穫3日前	5回 以内

### (2)ネギアザミウマ、ハエ類の防除

- ・ほ場でネギアザミウマの成虫を確認したら、速やかに防除を開始してください。
- ・ネギハモグリバエの幼虫がりん茎に侵入すると、品質が著しく低下します。幼虫による被害が進むと防除効果が得にくくなるため、葉に縦に並んだ白い点状の成虫食痕を確認したら、直ちに防除を実施してください。

表11 たまねぎネギアザミウマの防除体系例

防除時期	薬剤名	RACコード	使用濃度	使用時期	使用回数
6/上	トクチオン乳剤	1B	1,000 倍	収穫7日前	4回 以内
6/中	ファインセーブフロブル	34	1,000～2,000 倍	収穫3日前	3回 以内

表12 たまねぎハエ類の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	害虫名	使用濃度	使用時期	使用回数
ダイアジノン 乳剤 40	1B	ネギハモグリバエ	1,000～2,000 倍	収穫21 日前	2回 以内
		タマネギバエ	700 倍		
ベネビア OD	28	ハモグリバエ類	2,000 倍	収穫14 日前	3回 以内

## < ながいも >

### (1)マルチ栽培での芽やけ対策(スリットからの芽出し)

生育の早いほ場では萌芽が始まっています。ほ場の見回りをこまめに行い、マルチのスリット部に芽が引っ掛かっているものは速やかに出して、芽やけ(高温障害)を防ぎましょう。

## < ごぼう >

### (1) 除草剤処理

- ・ごぼうは初期生育が緩慢で、雑草害が生じやすいため、早期の雑草対策が必要です。
- ・アグロマックス水和剤は、発芽時の地割れが発生するまでの処理としてください。

表13 ごぼうの除草剤例

薬剤名	処理方法	使用時期	10a 当薬量	使用回数
アグロマックス 水和剤	全面土壌散布	は種後雑草発生前	200~300 ml	1回以内
		は種後雑草発生前(べたがけ)	100~200 ml	
ナブ乳剤	雑草茎葉散布 または全面散布	雑草生育期 イネ科3~5葉期 イネ科6~8葉期	150~200 ml 200 ml	1回以内

### (2) 中耕、除草

ごぼうは酸素要求量が高いため、ほ場が硬く酸素が少ないと根の生育が悪くなります。ほ場が硬くなっている場合は、除草を兼ねて中耕してください。

### (3) 分肥

計画的な分肥を実施する場合は、は種後 60~70 日頃(本葉 3~4 葉期)に施肥してください。

## 周辺作物への飛散(ドリフト)防止の徹底と農作業安全

- ・作物の成長も進み、農薬散布の機会が増える時期です。農薬散布に際しては風向きに注意し、周辺作物への飛散防止に努めてください。
- ・農薬を使用するときは、必ずラベルの安全使用基準や注意事項を確認しましょう。
- ・農薬は必ず保管庫にしまい、カギをかけましょう。
- ・使用した農薬容器や袋は、適切に処理しましょう。
- ・農薬散布の際は、マスク、防除衣、ゴム手袋、帽子、防除用メガネ、長靴、肌を覆うタオルを身につけ、しっかり安全対策をとりましょう。
- ・作業機連結時の挟まれ事故、機械昇降時の落下事故に十分注意しましょう。

